

2022年度 在外研究制度 研究員

所属	氏名	職位	種別	期間	主たる研究国	主たる研究先	研究題目	研究報告	備考
文	津田 徹英	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	イギリス	セインズベリー 日本藝術研究所	イギリスを中心とする在外日本古美術品の調査研究	在外研究中に大英博物館、イーストアングリア大学アートセンター等において日本古美術品の熟覧を行った。前者は日本の研究者があまり注目しなかった中世「異神」を対象に、後者はコレクションの存在自体が日本の研究者に周知されていないものであるが、特に注目すべき作品を対象にして行った。成果は今後適宜、論文、研究報告、講義等のなかで公表してゆく予定である。	
文	韓 京子	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	韓国	ソウル大学 日本研究所	植民地朝鮮・台湾における日本古典芸能愛好会活動に関する調査	ソウル大学日本研究所にて、所謂外地における日本古典芸能の受容と外地在住日本人の文化活動に関して調査を行った。朝鮮では、1876年の開港以降日本人居留地が設置され移住民が増えるなかで伝統芸能の同好会活動も活発化していた。主に素人義太夫と、藝妓・帮間による素人公演に焦点を当てて調査を進めた。合わせて、植民地期の台湾における伝統芸能の同好会活動についても調査し、朝鮮との共通点と相違点についても確認することができた。所謂外地における伝統芸能の同好会の活動に関する研究は植民地研究だけではなく、近代芸能史の一端を明らかにするものになるといえる。	
経済	元山 斉	教授	長期 (1年)	2022.9.1 ～ 2023.8.31	オランダ	Technische Universiteit Delft	標本調査と調査データの統計的推論に関する理論的・実証的研究	デルフト工科大学の応用数理研究所で、標本調査法によって得られたデータに基づく統計量の漸近理論の研究と調査データに基づいた統計的推論の研究を行った。在外研究期間中に3本の論文を執筆し公開し、1冊の本を上梓した。また、ヘルシンキ大学で開催された学会で報告を行った論文を査読付き学術誌に投稿している。	
経済	SCHIEDER, Chelsea S.	教授	短期 (6か月)	2022.4.1 ～ 2022.9.15	イタリア	University of Bologna	資源と人間：グローバル石油化学企業における物流と移動と社会的な影響	2023年10月23日～11月11日まで青山学院ジェンダー研究センターのギャラリーでイタリアで触れ合った「草の根」のアーカイブとその歴史を紹介する展示を行う予定です。 題名：「忘却への抵抗：ヨーロッパのアクティビスト・アーカイブにおける周縁から集合的記憶まで」 2023年11月11日にこのテーマについて大学公開講座をします。	
国政	佐桑 健太郎	准教授	長期 (1年)	2022.8.20 ～ 2023.8.19	アメリカ	インディアナ大学	国家間の協調と対立の構造分析—変化の要因と安全保障に与える影響	在外研究期間中は、主に申請テーマである「国家間の協調と対立の構造分析—変化の要因と安全保障に与える影響」を中心に研究活動を行い、以下のサブテーマについての研究をすすめた。第一に、国家間の地位をめぐる対立の分析、敵対・同盟ネットワーク上で起こる戦争拡大の理論モデル構築を行い、分析の結果、同盟と敵対ネットワークの形態が戦争拡大にそれぞれ相互作用しながら影響を与えることが理論的に立証できた。第二に、国家の対外政策変化の国内要因についての研究を行った。第三に、冷戦終結後東アジアにおける国際協調と対立パターンの計量分析を行った。第四に、地理的な隣接構造の上で起こる規範の伝播の理論モデル構築と、それを利用した領土問題の平和的解決の分析のための定量的なデータ探索を進めた。申請テーマに関するいくつかの領域で研究を進め、成果を上げることができた。	
国政	藤重 博美	教授	長期 (1年)	2022.9.4 ～ 2023.9.3	イギリス	ロンドン大学 (School of Oriental and African Studies: SOAS)	英国の外交・安全保障政策における「安定化」概念・政策の起源、形成過程、政策的インプリケーション ～特に「脆弱国家」支援の文脈において～	2022年度から2023年度にかけて、1年間、英国・ロンドン大学(東洋アフリカ学院: SOAS)において在外研究の機会を得て、英国の外交・安全保障政策における「安定化」概念・政策についての研究を進めることができた。「安定化 (Stabilisation)」は、2001年の同時多発テロ発生を受け、テロの温床となったアフガニスタンを始めとする「破綻国家」をいかに安定化させるかという問題意識から生成された政策である。2000年代以降、欧米諸国の多くで採用されてきたが、特に安定化政策に力を入れてきた英国で研究活動に従事することで、同分野の研究を有意義に進めることができた。	
理工	熊野 寛之	教授	長期 (1年)	2022.4.1 ～ 2023.3.31	アメリカ	ウイスコンシン大学 ミルウォーキー校	バイオマス資源の熱分解およびガス化プロセスにおける熱分析に関する研究	University of Wisconsin-MilwaukeeのR. Amano教授の下で、家畜などから排出されたバイオマスの熱分析に関する研究を行った。廃棄物として処理される家畜の排せつ物を加熱し、ガス化することで燃料となるガスを資源として採取することを念頭に、試料の熱分解時の質量変化や放熱量の挙動などの基礎特性を把握した。熱分析装置を用いて、試料を加熱する際の加熱速度や家畜ごとの排せつ物の違いが、分解挙動に対して与える影響を実験的に評価するとともに、試料の分解挙動を予測するための数値モデルの構築を行い、試料の分解速度を予測することが可能となった。	